

磨製石剣からみた 韓半島青銅器時代社会

島根大学法文学部准教授
平郡達哉

はじめに

青銅器時代には本格的な農耕社会が形成されはじめると共に、次第に社会の複合度が高まっていくものとされている(李盛周2000、武末2002、裴眞晟2006b、安在皓2006、李相吉2006、金承玉2007、金鐘一2007、庄田慎矢2007、李熙濬2011など)。筆者はこれまで墳墓資料からこのような農耕社会の形成・発展に対してアプローチする作業を進めてきた。墳墓資料から当時の社会を復元しようという試みは数多くの研究者によって進められている。

墳墓資料自体は新石器時代から見られるが、青銅器時

代のそれは定型化した墳墓構造・副葬品の多様性、そして一連の葬送儀礼の挙行など複数の要素において相違点がある。副葬品について見ると、新石器時代には見られなかった琵琶形銅剣・銅矛・銅鏃、磨製石剣・石鏃といった武器の形態をなす副葬品が出現する。この中でも支石墓や石棺墓などの墳墓の副葬品として製作された磨製石剣は中国東北部から沿海州、韓半島、北部九州・瀬戸内西部において見られるが、分布と出土数量、形態の多様性などからみてその中心地は韓半島にあるといえる。ここではこれまでの磨製石剣研究の流れを振り返り、その課題を提示した後、韓半島青銅器時代社会において磨製石剣がいかんにして使われ、どのような意味を持った器物であったのかについて考えてみる。磨製石剣は住居址と

いった生活遺構からも出土するが、大部分が墳墓の副葬品として出土しており、本稿では墓制研究の側面から当時の社会の性格について論ずるため、墳墓出土品に対する検討を行う。

1 研究動向と課題

現時点で韓半島磨製石剣に対する最も古い言及は、1886(明治19)年に神田孝平が開城から出土したと伝わる磨製石剣を『東京人類学会報告』の「雑記」にスケッチと共に紹介したものと考えられる(神田孝平1886)。しかし、磨製石剣が韓半島の歴史を物語る歴史資料として認識されはじめたのは、20世紀の初め、朝鮮統監部及び朝鮮総督府による植民地経営事業の一環として行われた文化遺跡調査が開始してからである。この時期には磨製石剣に対する初歩的な分類を試みられたが(梅原末治1922、高橋健自1925)、明確な分類基準があつたわけではなく形態分類に近いものであつた(有光教一1956)。

その中で韓半島出土磨製石剣に対する最初の本格的な論考を発表したのは有光教一であつた。1939年と1

CHEONGHAK

955年の論考において基部の形状による分類(A形式(有茎式)、B形式(有柄式)、C形式(無茎無柄式)、D形式(柳葉形)および剣身の樋の有無という要素を加えて型式を細分させ、有樋のものから無樋のものへの変化を考えた(有光教一1955)。有光は磨製石剣の祖型として細形銅剣又は鉄剣を挙げた。分布状況にも違いがあると、A形式は韓半島西北部を中心分布域とし、B形式は漢江流域以南に広く分布するとした(有光教一1939)。上記の一連の研究をまとめたものが1959年の『朝鮮磨製石剣の研究』である。205点の磨製石剣の図面を提示し、それを基に型式分類と分布、出土遺構(埋葬遺構)について検討するなど体系的な研究を行った。そして、磨製石剣が持つ歴史的・社会的意味について、支石墓のような巨大な建造物の構築が可能な社会が存在していたことを前提にしつつも、磨製石器を作ることに長じていた韓半島土着の石器時代人が、より高度な文明を所持していた征服者の道具を模倣したものという観点からの議論であつたと評価される(田村晃一1988)。これ以降、韓半島出土磨製石剣の研究は有光教一の研究成果を軸にして、その内容の賛否を問う形、あるいは批判的に継承していく形で進んできた。

1967年に『韓国支石墓研究』が刊行されたが、この研究報告書は単に青銅器時代墓制研究の転換点となっただけでなく、磨製石剣研究にも重要な意味を持った。つまり、京畿道坡州玉石里遺跡の卓子式支石墓調査時、その下層で確認された長方形住居址から血溝を持つ有段柄式石剣が出土し、これと共伴した建築部材と考えられる木炭片に対するC14年代測定値(2690±105 B.P.)が公表された。その結果、磨製石剣の年代が遅くとも紀元前6世紀後半に遡る可能性が提示され、細形銅剣の年代よりさかのぼることから有光が提示した細形銅剣祖型説が否定された(金載元・尹武炳1967)。

その後、『韓国支石墓研究』での調査・研究成果を基に韓国人研究者を中心に型式分類と磨製石剣の祖型をめぐる論考が1990年代半ばまで継続的に発表されていった。特に型式分類については多くの研究者によつて見解が提示されているが、その大枠は有光が提示した基部形態の違いによつて有茎と有柄に大別するという点では一致していた。その中でも田村晃一と沈奉勤の研究は有光の研究成果を批判的に検討・継承しつつ、分類と編年の枠組みを明確にした点で1990年代までの研究を総括する成果を示した(田村晃一1988;沈奉勤1989)。

段階高めたのは朴宣映の研究である(朴宣映2004:2009)。

もう一つの論点として、韓半島出土磨製石剣の起源に対するものがある。新石器時代には見られず、青銅器時代になって出現する磨製石剣が何らかの青銅剣をモデルにして製作されたとする観点もやはり研究開始当初から提起されてきた。

有光教一は細形銅剣と磨製石剣との分布が一致する点を根拠に細形銅剣を祖型としたが、この見解については、先ほど述べた京畿道坡州玉石里遺跡での長方形住居址出土磨製石剣の年代から否定されることとなった。その後、多くの研究者がオルドス式銅剣、中国式銅剣等を磨製石剣の祖型と想定してきたが、具体的な比較資料を提示しつつ祖型を提示したのは金邱軍であった。彼は磨製石剣に対する詳細な型式分類を行い、分布論や銅剣と石剣の剣身の比較、石剣が描かれた岩刻画などを提示しつつ、磨製石剣の祖型として琵琶形銅剣を挙げている(金邱軍1996)。

近藤喬一は慶尚南道義昌郡(現、昌原市馬山会原区内西邑)平城里や蔚山彦陽面東部里180番地出土の有樋有段柄式石剣は遼寧省寧城小黒石溝M8501石槨墓出

1990年代以降続く大規模発掘調査の正式報告書が刊行されるとともに磨製石剣資料が増加し、出土遺構の種類や詳細な出土状態が分かる事例が増えたことをうけて、磨製石剣の出土状況を基に副葬行為や儀礼行為の復元を試みる研究が試みられた(趙榮濟1998、河仁秀2000、李相吉2000、後藤直2000、平郡2008:2009)。

また、この時期は有柄式石剣の編年研究が進むとともに、副葬状態に対する検討を基に青銅器時代社会において磨製石剣が有した意味・意義付けが試みられた時期である(裴眞晟2006a、黄昌漢2008、張・平郡2009)。また、韓半島内の地域ごとにおける磨製石剣の様相に対する研究(成璟塘2005、劉美香2006、孫峻鎬2009、姜元杓2006)、沿海州出土石剣の集成・再検討など研究対象地域の細分化・拡大がみられる(姜仁旭2011、Oksana Yanshina・Shinya Shoda 2013)。

それまで多くの研究者によつて磨製石剣の分類と編年研究が進められてきたが、既存の有柄式石剣の型式分類案・編年案をより具体的に提示するとともに墳墓での共伴遺物による型式変遷の妥当性を検討し、研究水準を一

土琵琶形銅剣をモデルにしたものと指摘し、より直接的な根拠資料をしており、祖型に関する論議において近藤喬一説の影響は強い(近藤2000)。

宮本一夫は東北アジアにおける磨製石剣の出現過程を簡潔明瞭に説明している。有茎式石剣は鈴首剣(宮本分類のB1式銅剣)を模倣して遼東・韓半島北部で成立し、有段柄式石剣は近藤喬一が示したように遼西の琵琶形銅剣(宮本分類のC1式銅剣)と関連づけた(宮本2004)。

今後の課題のひとつとして、磨製石剣の製作・流通に関する問題がある。数多くの磨製石剣が出土しているが、出土遺構の大部分は支石墓、石棺墓などの埋葬遺構である。住居址からの出土品も存在するが(李ジェウン2011)、磨製石剣製作の一連の過程を示すような資料は現在のところ未確認である。今後も資料の持続的増加によつて製作と関連した資料の発見も期待され、それらの資料を基に磨製石剣の製作と流通についても言及することが可能となろう。

研究視角・目的の大きなビジョンとして庄田慎矢・寺前直人が指摘しているように「内的には武器、武威の社会的機能やその所有による階層化の進展、外的には素材

獲得と生産技術の高度化による物流を介した中心・周辺関係の形成」(庄田・寺前2012)などを見通した研究目的の設定が必要であろう。

また、近年では青銅器の模倣という側面から東北アジアにおける磨製石剣の社会的位置付けを行う研究もあり、今後の研究が展開してゆくべき方向性を示している(庄田2016)。

2 型式分類と編年

韓半島磨製石剣研究の初期段階から重要な位置を占めていたのは型式分類に対する検討であった。その中でも影響力を持つものが研究史でも述べたように、有光教一の提示した分類案であった。これまで日韓の研究者によって様々な型式分類・編年案が提示されてきた*。

まず、有光が指摘したように磨製石剣は柄部の有無によって、つまり柄を剣身と同時に表現した有柄式と、柄を木など別の有機物で製作する有茎式に大別される。

有茎式石剣は田村晃一、李栄文、中村大介が提示しているように、分類基準は茎部の長さ・幅、挟りの有無が挙げられる(田村1988、李栄文1997、中村20

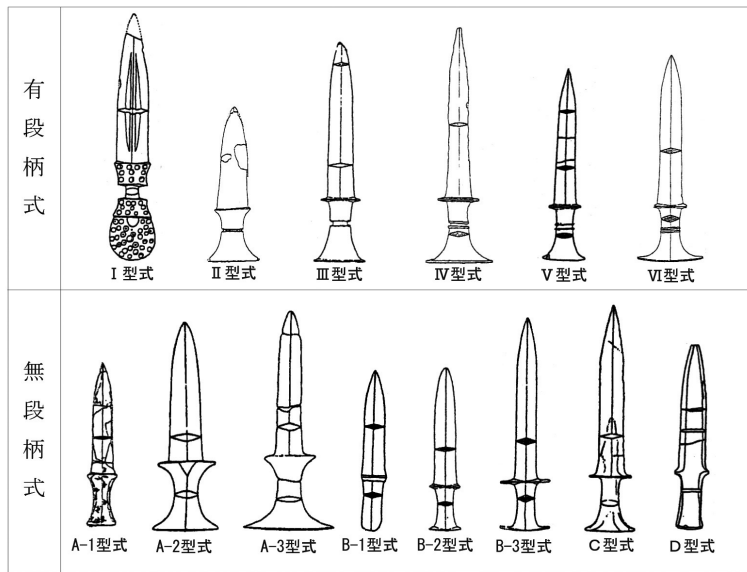


図1 有柄式磨製石剣分類図(朴宣映2004を基に作成)

CHEONGHAK

を「裝飾石剣」と呼び、青銅器時代前期に製作・副葬された*₂(黄昌漢2008)。さらにIV・V・VI型式は柄の上*₂下段に帯状の節を持つ有節柄式に該当し、前期末から後期後半にかけて製作・副葬された。有段IV式は共伴遺物として平根一段茎式石鏃(上紫浦里4号支石墓)と尖根一段茎式石鏃(如意谷30号支石墓)が見られることから前期末から後期前半、有段V式でも平根一段茎式石鏃が見られるが、有段V式の中心地域は大邱地域にあり、この地域では平根一段茎式石鏃が後期前半まで残る(李秀鴻2005、庄田2007)。有段VI式は尖根一段茎式石鏃が共伴するため後期後半に該当する(張龍俊・平郡2009)。

次に無段柄式石剣は、剣身と柄部との連結形態によってA・B・C・Dの4型式に分ける。さらにA・Bを鏢部の突出度によって、それぞれ表2のようにA1・A2・A3、B1・B2・B3式に分けられる(朴宣映2004・2009)。

そして、各型式の共伴遺物の検討からA1↓A3式、B1↓B3式への変化を提示するとともに、A型とB型の併行関係についても言及されており、それらを整理したものが表3である。

I2)。中村による分類で有茎式石剣を簡潔明快に説明できるためこの分類に従う。

有茎I…剣身に比べ茎部が細いもの。血溝の有無で細分される。

有茎II…茎部が挟りなどによって多段をなすもの。

有茎III…茎部の段が減り、逆T字形をなすもの。

有茎IV…茎部が方形で幅広の突起があるもの。

無茎式…茎部が無く、剣身のみもの。

さらに有柄式は柄部の形態的特徴、つまり柄が上段・下段に分かれ、これを繋ぐ段連結部を有する有段柄式(有節式)石剣と、柄部が上段・下段に分かれない無段柄式石剣に分けられる(図1)。有段柄式石剣は柄の中央にみられる段連結部の長さ・断面形態、鏢部の突出度、柄頭部の形態、剣身の形態、剣身と柄部の連結形態、血溝の有無によって、I～VI型式に分けられる(表1)。中でも段連結部に注目し、各型式の共伴遺物に対する検討から、I↓VI型式への変遷が提示されている(朴宣映2004・2009)。I・II型式のうち、柄部に円形の小穴があげられたものや把頭が付いた裝飾性の高いもの

表1 有段柄式石剣の分類と分期 (朴2004より作成)

分期	要素	段連結部長さ	段連結部断面形態	帯状の節
	型式			
I期	I型式	1.5cm以上	円形・楕円形	無し
	II型式	1~1.5cm	長楕円形・隅丸長方形	無し
II期	III型式	1cm未満	レンズ形・菱形、レンズ形多い	有り
	IV型式(有節式)	1cm未満	レンズ形多い	明確に。柄部幅より外に突出
III期	V型式(有節式)	1cm未満	レンズ形・菱形、同じ割合	さらに明確に。側面の突出も明確
	VI型式(有節式)	節1条と同じ	菱形多い	柄部の表裏のみあり、側面研磨

表2 無段柄式石剣の分類 (朴2004より作成)

型式	分類基準
B 剣身と鐔部、鐔部と柄部の連結が両側ともに緩慢に連結して、鐔部が節の形態をなすもの。平面からみた場合、鐔部から剣身と柄部への連結が対称となるもの。 B1:剣身と柄部が区別できるほど短く突出 B2:鐔部が1cmほど突出 B3:鐔部が2cm以上突出	
C 剣身と柄部の連結部が節の形態をなす。平面からみた場合、鐔部から剣身へは緩慢に連結する反面、鐔部から柄部は急に角をなして連結し、非対称的なもの。	
D 鐔部が表現されておらず、平面からみた場合、剣身と柄部の連結に段や節がなく、面でつながるもの	

表3 各型式磨製石剣の時間的相対関係 (朴2004改変)

分期	型式	有段柄式石剣	一段柄式石剣				有茎式
			A	B	C	D	
1期	I型式	I					
	II型式						
2期	III型式	II	I、II	C	D	有茎式	
	IV型式						
3期	V型式	III	III				
	VI型式						

上記のような型式分類と変遷を基に、副葬される磨製石剣の特徴と意義づけを以下で行う。

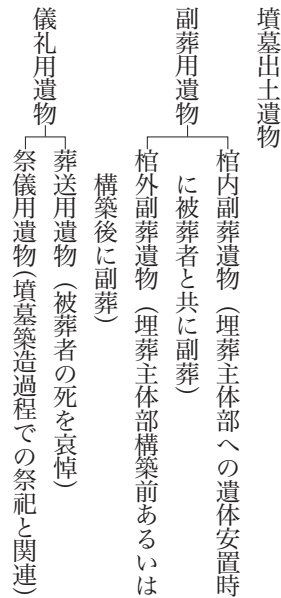
3 磨製石剣の副葬とその特徴

ここでは、韓半島出土磨製石剣の主な用途・機能と考えられる副葬行為について調べてみよう。青銅器時代墓制における副葬行為に対する研究は、墓制資料が増加し始めた2000年代になって進展を見せた。その先駆的な研究としては李栄文のものがあり、支石墓出土品の性格づけを行った。彼は遺物の出土位置を基準に埋葬主体部内から出土する副葬用と埋葬主体部の外側や周辺に構築された積石施設の間から出土する儀礼用に大別し、さらに儀礼用を用途によって被葬者の死を哀悼する意味を持つ葬送用と支石墓築造と関連した祭儀用とに細分している(李栄文2002)。これを受けて筆者も副葬遺物を下記のよう区分した(平郡2009)。特に、副葬用遺物は埋葬主体部への遺体安置時に共に納める棺内副葬遺物と、意図的に埋葬主体部の外側に納める棺外副葬遺物に分けられるが、両者には琵琶形銅剣、管玉、磨製石剣・石鏃、赤色磨研土器が共通して出土している。

CHEONGHAK

まず、磨製石剣の棺内副葬について見てみよう。韓半島青銅器時代の墳墓、特に支石墓における副葬が希少な行為であり、その数少ない副葬品の中でも大多数を占めるものが石剣であることは指摘されてきた(後藤直2000)。韓半島南部に多くの青銅器時代墳墓遺構が調査・報告されている全羅南道と嶺南地域(慶尚北道・慶尚南道)の場合、全埋葬遺構に対する磨製石剣の副葬率はそれぞれ7.3%、8.4%と非常に低い(平郡2012)。

このような磨製石剣がどのように副葬されるのかについて、埋葬主体部内での出土状況から言及可能である。埋葬遺構での詳細な出土状況の分かる資料が多く確保されている嶺南地域の磨製石剣62点について以下のように



副葬類型を設定した(図2)。

- I 類型…埋葬主体部の長壁に沿った中央(30点)
- II 類型…埋葬主体部の長壁に沿った短壁寄り(8点)
- III 類型…短壁沿い(4点)
- IV 類型…石室中央(12点)
- V 類型…不定・曖昧なもの(4点)

62点中38点が長壁に沿って出土しており、そのうち長壁中央から30点確認されているが、この位置は被葬者の腰部部分に当たることから佩用状態を示すものと解釈でき、磨製石剣の基本的副葬パターンであると考えられる。これから出土する磨製石剣は全長が35cm以上のものが多く、剣身と柄部の長さの比率が3・1をなすような非常に長い剣身を持つことが特徴である。このような長い剣身を持つものは武器としての機能を有するというよりは、副葬用に製作されたものといえる(平郡2008・20012)。

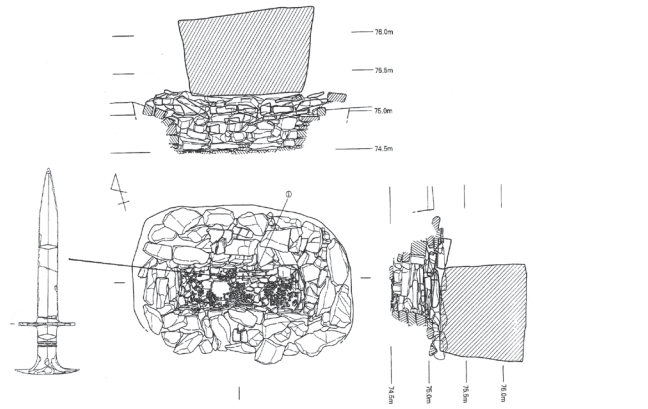
より具体的に磨製石剣の副葬位置・状況を知るためには、磨製石剣と人骨が共に調査される事例についても調べてみる必要がある。関連資料の数は少ないが、埋葬

主体部内での磨製石剣と人骨の重複関係から見ると、埋葬主体部内に遺体を安置する前に磨製石剣を長壁に沿った床面に置いたことが達城坪村里3号・20号・28号石棺墓の事例から分かる(図3)。また、晋州中川里III-1号石棺の場合、上半身は右腕を真っ直ぐ伸ばし、左手を腹部に置き、下半身は脛骨を45度ほど傾けた屈葬状態をなす人骨が検出された(図4)。磨製石剣は被葬者の右腹部上部に柄を頭部に向けて副葬されているが、人骨との重複関係が不明なため、遺体の安置前に床面に置いたかどうかは不明である(ウリ文化財研究院2009)。しかし、磨製石剣の佩用状態を意識した副葬であることは分かる。

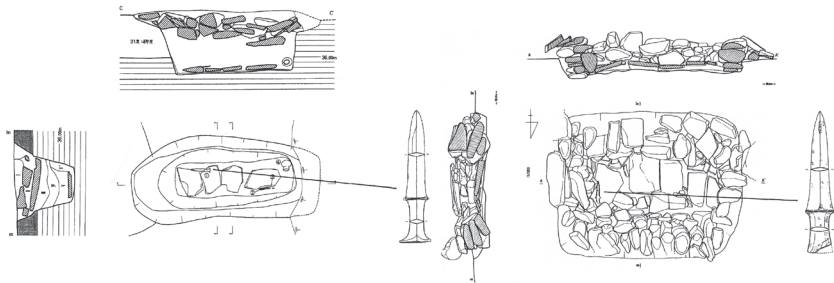
この他にも忠清北道堤原郡黄石里13号支石墓、晋州本村里1号・2号石棺墓でも磨製石剣と人骨が共に調査された事例がある。

忠清北道堤原郡黄石里13号支石墓では人骨の右膝関節の横から鋒を被葬者の頭側に向けて磨製石剣が出土している。年齢や性別については鑑定が行われていない(金載元・尹武炳1967)。この場合、先ほど述べた磨製石剣副葬のII類型に属するものとなる。

晋州本村里1・2号石棺墓は並列して築造されており、

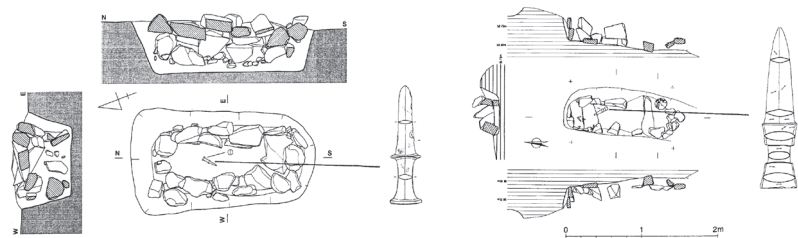


I 類型 清道 陳羅里1号墓



II 類型 梁山 所土里40号墓

III 類型 晋州 玉房1地区5号墓



IV 類型 泗川 梨琴洞C-1号墓

V 類型 龜尾 月谷里1号墓

図2 磨製石剣の棺内副葬類型

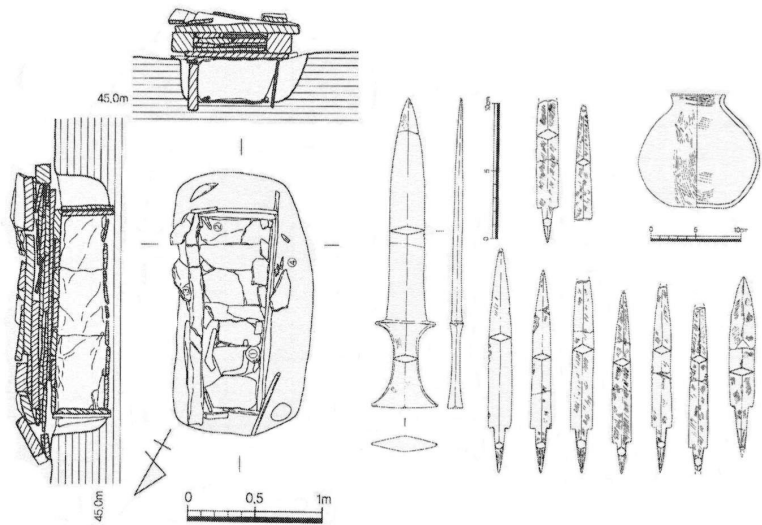


図5 本村里カ-1号石棺墓

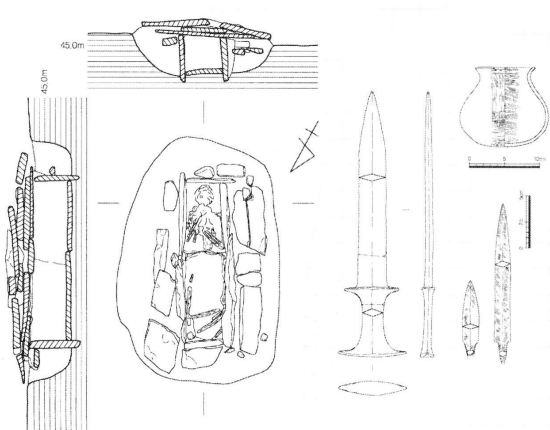


図6 本村里カ-2号石棺墓

製石剣を人為的に割って鋒先・身部・柄部の3片に分けて長壁外側の補強空間に棺外副葬した。鋒先片は補強石最下位から、身部片は補強石中位から、そして柄部は1次蓋石と同じ高さの補強石上位から出土したと報告されている(慶南考古学研究所1997)。副葬位置が長壁中央から短壁寄りの地点であることは棺外副葬される磨

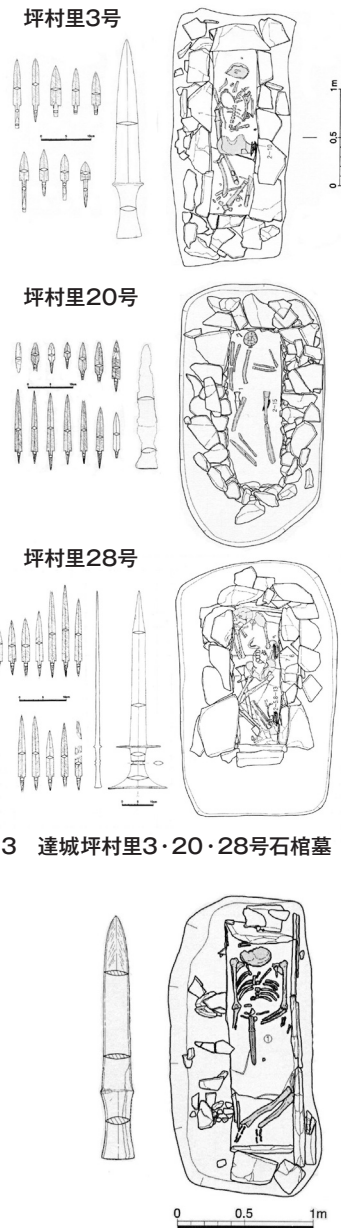


図3 達城坪村里3・20・28号石棺墓

図4 中川里Ⅲ-1号石棺

1号からは磨製石剣、2号からは磨製石剣と石鏃が出土している。
1号石棺墓では頭蓋骨と脚部が残存していた。頭蓋骨のそばには人為的に割られた磨製石剣の身部片が副葬されていた。残りの鋒部と柄部は東壁石と蓋石の間に副葬つまり棺外副葬されていた。これら棺外副葬遺物は全て壁石の上段部から確認されており、蓋石を築造する過程で副葬したと報告されている(慶尚大学校博物館2011)(図5)。1号石棺墓からは左右の大腿骨が検出されているものの、性別と年齢は不明である。

2号石棺墓では人骨の痕跡は比較的良好に残存しており、頭蓋骨は南短壁、脚部は北短壁に密着しており、仰臥屈伸葬をなす。磨製石剣は北短壁外側の蓋石の間から人為的に3片に割られて重なつたまま出土している。人骨は頭蓋骨と左右の四肢骨、躯幹骨が確認されており、左右の前腕骨の肘関節は曲がって胸部側に合わせている(図6)。性別と年齢については成年後半(30代)の女性と鑑定されている(慶尚大学校博物館2011)。
特に、本村里1号石棺墓のような石剣の副葬は、慶尚南道泗川市梨琴洞A-1号でも確認される。ここでは磨



図7 平昌郡平昌邑下里2号墓 人骨および琵琶形銅剣出土状況
(江原考古文化研究院2016より転載)

CHEONGHAK

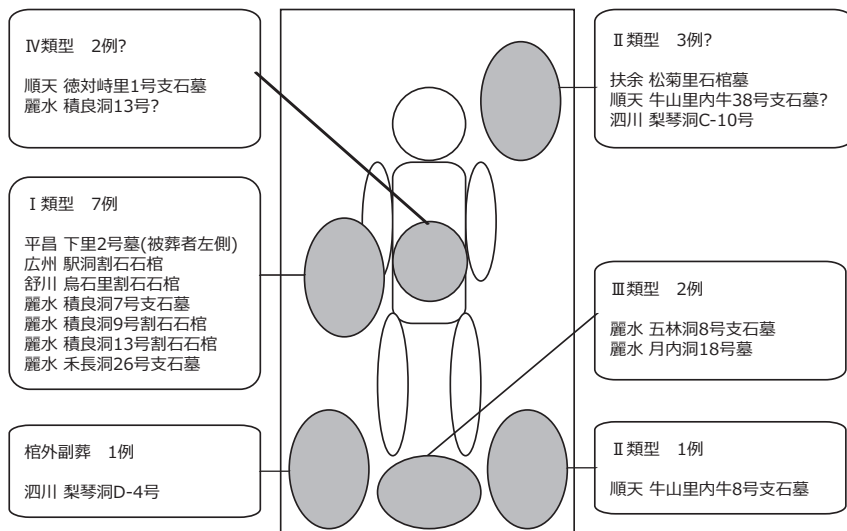


図8 青銅器副葬位置模式図

製石剣の特徴を示している。
次に同じ武器形の副葬品である琵琶形銅剣の副葬様相との比較を行い、磨製石剣の副葬様相との関連性について言及してみよう。現時点で青銅器時代墳墓から出土し、その詳しい出土状況の分かる琵琶形銅剣は17点ある。琵琶形銅剣の副葬様相について、被葬者の年齢・性別を知る手がかりとなる人骨資料とともに出土した事例は磨製石剣以上に少なく、広州駅洞マー1号墓のものがあるが頭位や埋葬姿勢が分かるほど人骨は残存していない。ただ、最近調査された江原道平昌郡下里遺跡2号墓で、琵琶形銅剣と良好な状態で残存している人骨が埋葬主体部内から検出されており、琵琶形銅剣の副葬方法について重要な情報を提供している。詳細については正式報告書の刊行を待つこととしたいが、略報告書から分かる限りで言えば、下里遺跡2号墓は板石を立てて棺を構築し板石1枚で蓋石としている。棺内からは人骨(頭蓋骨、上下顎骨、歯、上下腕骨、大腿骨、脛骨、腓骨)が検出され、琵琶形銅剣は被葬者の左腕付近から体に平行するよう、鋒を足先に、茎部を頭側にして身部中間部分で2つに割れた状態で出土している(江原考古文化研究院2016)(図7)。石棺内は長辺163×短辺53cm、深さ

25cmを測り、その規模や人骨の出土状況から見ても被葬者は1名であると言える。
琵琶形銅剣と人骨が共伴しない場合でも、被葬者の頭位が分かれば被葬者と琵琶形銅剣の副葬位置の関係を知ることができるであろう。そのためには棺内副葬遺物、特に管玉など首飾りの部材と考えられる遺物が出土する事例(忠清南道扶余郡松菊里石棺墓、忠清南道舒川郡烏石里周溝石棺墓、全羅南道順天市牛山里内牛8号、慶尚南道泗川市梨琴洞D-4号墓)を基に、管玉が出土する場所に頭位がある可能性が高いと指摘し、琵琶形銅剣は鋒を脚側に向け、茎部を頭側にして副葬した、つまり茎部側に頭位があるとみた(平郡2012)。
琵琶形銅剣と人骨の出土例から見ると、茎部や柄部の方向を頭位の基準とすることができよう。これを基準にすると韓半島青銅器時代墳墓出土の琵琶形銅剣17点中、埋葬主体部の長壁に沿って出土したものは12点となり、棺内出土琵琶形銅剣の70%を占めることから、基本的な副葬方法であったと考えられる(図8)。長壁に沿って出土するものをもう少し分けると、長壁中央に沿った床面に置かれる、つまり被葬者の腰の右側から7点、頭の左側から3点、胸部左側と左脚付近で各1点となる。



図10 韓半島新石器時代と青銅器時代墓制における共通点と相違点

CHEONGHAK

これを挙げる事ができ、これは磨製石剣より出土数が少なく希少性の高さが想定される琵琶形銅剣の副葬パターンと共通点を有していることが分かる。

4 磨製石剣と青銅器時代社会

前章で磨製石剣の副葬行為の特徴を調べてみた。次に青銅器時代になると現れる磨製石剣が持つ歴史的・社会的意義について考えてみる。

定住生活が始まり集落構成員の「死」を哀悼し遺体処理を行い埋葬する行為自体は、新石器時代から見られる。ここでも副葬行為は行われ、耳飾りなどの玉製品、貝製腕輪・足輪、生業関連遺物(釣針、石斧、石槍、砥石、石鏃、石鏃)が出土している(任鶴鐘2003)。

これが青銅器時代になると、石材を利用して一定した外部構造(上石、支石、敷石・積石)・内部構造(埋葬主体部)を有する墳墓が築造されるようになり墓制の定型化がみられるようになる。そして、副葬の面では琵琶形銅剣・銅矛・銅鏃の副葬、磨製石剣+石鏃+赤色磨製石器のセット副葬、茄子文土器の副葬、碧玉製管玉の副葬といった点の特徴であるが、両時代には土器・石鏃の副葬

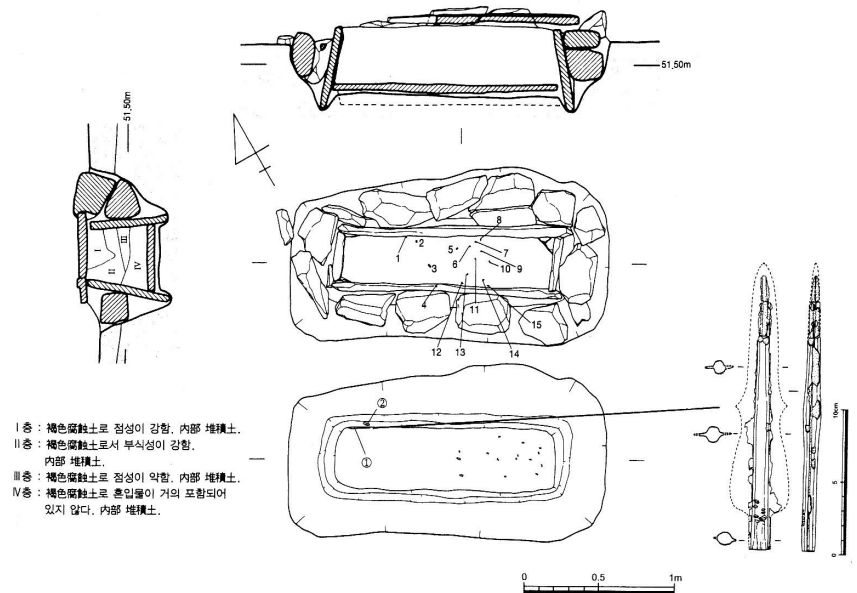


図9 棺外副葬された琵琶形銅剣(梨琴洞D-4号石棺墓)

厳密に規則化された副葬方法があるとは言えないが、埋葬主体部の床面に置かれている点は共通しており、被葬者の腰付近、つまり腰の右側に剣を佩用する様子を表現しており、これが琵琶形銅剣副葬の特徴である(平郡2012)。発掘調査時には琵琶形銅剣の剣身部分のみが出土するが、全羅南道の麗水積良洞7号支石墓・21号石槨、宝城徳峙里1号支石墓出土琵琶形銅剣の周辺では木質の痕跡が確認されており、木製の鞘に入れて副葬されたものと考えられる(李栄文・鄭基鎮1993・尹徳香1988)。

もう一つの副葬風習である棺外副葬における琵琶形銅剣と磨製石剣の比較を行ってみよう。唯一の青銅剣の棺外副葬事例である梨琴洞D-4号石棺墓では被葬者の右足元で鋒を足先方向に向けて、石棺の床石を敷く前の儀礼行為に伴って棺外副葬されている(図9)。一方、磨製石剣は長壁側から出土している。磨製石剣が本来持っている武器としての機能と梨琴洞A-1号の例以外は完形品であることを勘案して僻邪の意味を持っていたと解釈した(平郡2009)。

以上のように、磨製石剣副葬の特徴として、被葬者の腰部分への副葬、つまり剣の佩用状態を意識しているこ

という共通点も見られる(図10)。

青銅器時代になって新たに現れる多様な副葬品の中で、剣(銅剣・石剣)、鏃(銅鏃・石鏃)といった武器の形態を呈する副葬品について「武器形副葬品」と規定したことがある(平郡2012)。その中でも被葬者が生前に保有・管理していたと推定される棺内副葬遺物として、琵琶形銅剣・銅矛・銅鏃、磨製石剣・石鏃といった武器形副葬品が発見される点は重要である。

つまり、琵琶形銅剣と磨製石剣は1基の埋葬主体部から1点のみ出土することが基本的な副葬風習である(扶余松菊里石棺墓の場合、琵琶形銅剣と磨製石剣が共存する唯一の例となる(図11))。韓半島青銅器時代の墳墓の埋葬主体部はその規模からみて、1基の埋葬主体部に埋葬される人数は1人である。もちろん、1体の埋葬のみ可能な空間に複数の遺体を2次葬のような形で納めることも可能であるが、これまでのところそのような2次葬あるいは追葬を物語る資料は皆無である。基本的に1基の埋葬主体部に1名の埋葬、そして1点の剣の形態を呈する副葬品に複数の鏃の形態を呈する副葬品が副葬されるということが、磨製石剣の性格を推測するうえで重要な手がかりを示している。

上記の点から青銅器時代社会において琵琶形銅剣や磨製石剣といった武器形副葬品は特定の個人(被葬者)のための物品であったと考えられる。では、どのような被葬者がこのような属人性の強い物品を副葬できたのであろうかという疑問、つまり生前の被葬者の社会的地位を知るための重要な手掛かりとなるのは、被葬者の性別、年齢といった被葬者個人にまつわる情報となろう。

武器形副葬品と被葬者の年齢や性別の関係について調べるためには、原位置を維持した副葬品の出土はもちろん、良好な人骨資料の確保が必須となる。韓半島の土壌が強い酸性を帯びることから青銅器時代の人骨資料が残ることは非常に珍しいが、稀に保存条件が備わったいくつかの遺跡では多くはないものの墳墓遺構から人骨が出土している。これまで細かな人骨片まで含めると約60体分の人骨が知られており、そのうち約30体分で性別あるいは年齢に関する情報が得られている(平郡達哉2014)。

これまで数多くの青銅器時代墳墓遺跡が調査されてきたが、1遺跡で複数の人骨資料が副葬品と共に確認された事例は少ない。その中でも良好な残存状態を見せる人骨とこれと共伴した磨製石剣・石鏃といった副葬品、そ

れらが埋納された個別の埋葬遺構、そして個別の埋葬遺構が有機的な関係を維持しながら築造された墓区が確認されている達城坪村里遺跡は、当時の墓制・葬制を考えるうえで重要な資料となっている。ここではこの遺跡での磨製石剣副葬の様相についてやや詳しく見てみよう。

達城坪村里遺跡では青銅器時代後期後半の墳墓(石棺墓)28基が確認された。このうち、人骨が残存していた

のは19基である(1、3、6、7、11、12、13、14、15、16、17、19、20、21、22、23、25、27、28号墓)。これら人骨に対する形質人類学的調査が実施され、1、3、11、15号墓出土人骨は性別が不明であったが、残りの人骨は全て男性であった(朴善周2010)。これら被葬者の年齢についても報告されており、12〜18歳(1、7、25号)、20〜24歳(12号)、25〜29歳(13、15号)、30〜

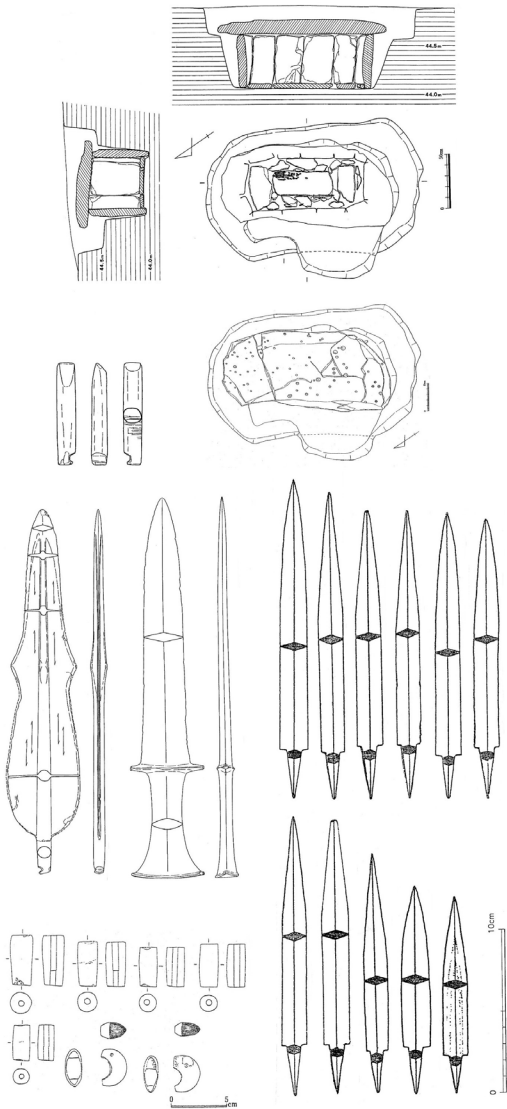


図11 扶余 松菊里石棺墓と副葬遺物

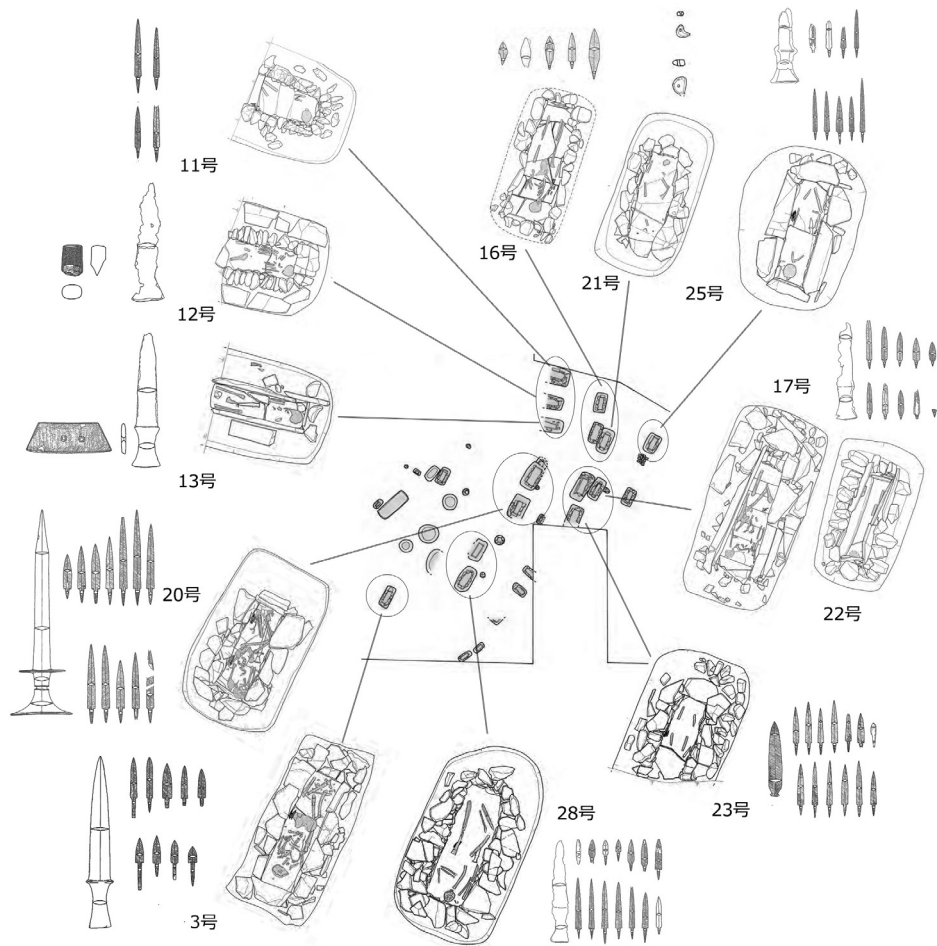


図12 達城坪村里埋葬遺構配置図(慶尚北道文化財研究院2010に加筆)

34歳(3、17、20、22、28号)、35〜45歳(6号)、45〜55歳(11、16号)、50歳以上(21号)と鑑定されている(朴善周2010)。

人骨が残っており、なおかつ磨製石剣の副葬が確認されたのは、3、12、13、17、20、23、25、28号墓の8基である。さらに年齢との関連を見ると、12〜18歳(25号)、20〜24歳(12号)、25〜29歳(13号)、30〜34歳(3、17、20、28号)、45〜55歳(11、16号)となり、磨製石剣が副葬される年齢としては30〜34歳つまり30代前半が中心をなすが、これより若い年齢や45〜55歳の被葬者にも副葬されており、年齢というカテゴリーが必ずしも磨製石剣副葬の明確な基準であるとは言い難い。むしろ、この遺跡でみる限り、被葬者が全員男性であったことを勘案すれば、性別が磨製石剣を副葬できるかどうかの基準であったと考えられる。ただ、晋州本村里2号石棺墓で検出された人骨は30代女性と鑑定されており(慶尚大学校博物館2011)、坪村里の傾向を韓半島全域に敷衍することはできない点に注意したい。

また、達村里の墓区は人骨が確認された埋葬遺構の主要方向と隣接様相を基に、7つのグループに分けることができる(図12)(平郡2012)。これをみると各グループ

ごとに石剣十石鏃をセットで副葬する墓が存在し、それらは列状配置を見せるが、その列状配置の中にもグループごとに若干の距離を置いており、かなりの比率で石剣十石鏃がセットをなすことが分かる。

このように青銅器時代の副葬遺物・副葬行為の特徴としては、属人性が強い武器形副葬品である銅剣・石剣1点、石鏃数点を1名の被葬者のために副葬したという点と、前章で述べたように全ての被葬者に副葬するのではなく、一部の被葬者のみに行われたという点を挙げることができる。

青銅器時代の副葬行為、特に磨製石剣副葬の意義について、後藤直は「武器として他の共同体との交渉における優位を獲得する力、人々を結集させる力、共同体を害する諸々の邪悪を払う力の象徴物であり、死後にも不可欠のものとして副葬される必要」があり、「武威を含蓄する儀礼、言説が諸問題の解決に不可欠の社会であったことを推定させる」とした(後藤直2000)。また、裴眞晟は問題解決者としてのリーダーの地位を表示する特権的な装置・特別な威信財としても琵琶形銅剣やその代用物として磨製石剣が使用されたとしている(裴眞晟2006a)。

出土位置から見た場合、佩用の状態を見せるものについては、生前に使用していた物品を副葬するものから副葬品として製作したものと考えられる大型品・儀器化したものを副葬することへの変化を指摘できる(平郡2009)。このような変化は磨製石剣が人を攻撃・殺傷するための道具であるというより、本来の機能である武器として有していた象徴性がより強調された物質資料であったためと考えられる。磨製石剣は青銅器時代社会で生じる様々な問題(集落構成員あるいは集落間の不和、葛藤などの緊張関係)を解決しなければならぬ状況で、問題解決者が武威を象徴するために保有したものであったと推定される。

そして、このような性格を持つ磨製石剣が特定地域にのみ存在するのではなく、韓半島のほぼ全域で見られる点は複数の集団間の交流・交渉関係を基盤にして、墓制が共有されていたことを物語っているであろう。特に、韓半島南部において磨製石剣を用いた埋葬儀礼が広い範囲に拡散していることは有節柄式石剣に対する検討から想定できる。全長と剣身部の形態に高い規格性・類似性を持つ有節柄式石剣が250〜300km離れた遠隔地間でも出土している。この型式の石剣は支石墓などの墳墓

あると考える。先述したように、磨製石剣は青銅器時代の集落構成員、あるいは集落間の不和、葛藤などの緊張関係など様々な問題を解決するために問題解決者が武威を象徴するために保有したものであった。そして、それが被葬者の生前の身分・地位を示すために1点副葬されたものと考えられる。達城坪村里遺跡での事例を参考にすれば、磨製石剣が副葬されるかどうかの基準は、年齢というよりも男性という性差によるものである可能性がある。

ここで注目されるのは韓半島青銅器時代の開始と共にこれら武器形副葬品の副葬が始まるのではなく、青銅器時代前期後半に墳墓築造の開始つまり、計画的および持続的に墓区を営むことを前提にした造墓が行われる段階に、磨製石剣の副葬が始まる点である。前期後半には各墳墓の規模や構造上の卓越性はまだ見られないが、やはり墳墓を築造できる人は制限的であったと考えられる。

韓半島磨製石剣の起源については研究史の部分でも言及したが、有柄式石剣については中国遼西地域から求めることができ、有茎式については遼東・韓半島北部での成立が指摘されている(近藤喬一2000、宮本一夫2004、中村大介2012)。庄田は坪村里遺跡での磨

遺構から副葬品として出土するが、被葬者の腰付近から出土する点、他の型式の石剣には見られない人為的に柄部突出部を破砕するなどの副葬慣習を持つ。このような副葬慣習が韓半島南部地域で広範囲に見られることから、青銅器時代前期末〜後期にかけて磨製石剣と関連した流通網と情報伝達網が存在し、埋葬儀礼が共有されていたと考えた(張龍俊・平郡達哉2009)。

結語

新石器時代から始まった定住生活のサイクルにおいて死者を埋葬し、葬儀を執り行う行為が本格的に行われるようになり、当時の人々は死者と生者という2つの立場の密接な関係性を有するようになった。青銅器時代には石材を用いた墳墓が構築されるようになり、既存の生業道具中心の副葬品から琵琶形銅剣や磨製石剣などの武器形副葬品が新たに登場したことは先ほど述べた。副葬品の種類に見られるこのような変化は、青銅器時代における農耕社会の形成と進展、つまり新石器時代の狩猟採集が主要な生業であった時代から稲作という食料生産が主要な生業となる社会へ移行していった中で現れる現象で

製石剣の副葬状況に中国東北部の十二台営子における青銅短剣との共通性を指摘し、遼西から韓半島南部へ短剣が伝播した際に短剣使用にまつわる概念もともにもたらされたのであろうと述べている(庄田2016)。

このように韓半島出土磨製石剣は中国東北部域からの青銅器時代文化の流入と青銅器の模倣や、韓半島での農耕社会の形成・展開過程との連動、さらには日本列島の弥生時代開始期における渡来文化の一要素としても見られるものであり、広く東北アジアにおける文化の流れを物語る物質資料であることを再認識させるものである。今後は集成研究を基にした広い視点からの研究が求められる。

韓国・日本での資料調査において、多くの方々の援助を受けた。末尾ながら感謝いたします。

釜山大学校考古学科・博物館(申敬澈・金斗喆・安星姫)、国立扶余博物館(金美京、李惠遠)、亞洲大学校博物館(吳相卓)、江原考古文化研究院(池賢炳・尹碩寅・洪周稀)、江陵原州大学校博物館(朴榮九)、羅州博物館(申相孝)、山口県立山口博物館(佐藤嘉孝)、釜慶大学校博物館(趙晟元)(敬称略)

参考文献

韓国語論文は便宜上、題目を日本語に翻訳した。

●日本語

有光教一 1938 「朝鮮江原道の先史時代遺物」 『考古学雑誌』第28巻第11号 日本考古学協会

有光教一 1939 「朝鮮に於ける磨製石剣の形式と分布」 『人類学雑誌』第54巻第5号 東京人類学会

有光教一 1955 「南朝鮮土着文化の考古学的考察」 『史林』第38巻第6号 史学研究会

有光教一 1956 「朝鮮出土の磨製石剣・細形銅剣を模した一群について」 『京都大学文学部研究紀要』4 京都大学文学部

有光教一 1959 「朝鮮磨製石剣の研究」 『京都大学文学部考古学叢書』第2冊

梅原末治 1922 「鳥取県下に於ける有史以前の遺跡」 『鳥取県史蹟名勝地調査報告』第1冊 鳥取県

神田孝平 1886 「雑記」 『東京人類学会報告』第10号 東京人類学会

甲元真之 1972a 「朝鮮半島の有茎式磨製石剣」 『古代文化』第24巻第7号 古代学協会

甲元真之 1972b 「朝鮮半島の有柄式磨製石剣」 『古代文化』第24巻第9号 古代学協会

甲元真之 1973 「東北アジアの磨製石剣」 『古代文化』第25巻第9号 古代学協会

後藤直 2000 「朝鮮青銅器時代」 『季刊考古学』第70号 雄山閣

近藤喬一 2000 「東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」 『山口県史料編考』山口県

庄田慎矢 2016 「東北アジアにおける金属器受容と短剣形石器の出現」 『青銅器の模倣Ⅱ』第65回埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集成

●韓国語

江原考古文化研究院 2016 『平昌平昌邑下里(240-4番地一巴)建物新築敷地内遺跡発掘調査略式報告書』

姜元杓 2006 「忠北地域磨製石剣検討」 『考古学誌』第15輯 韓国考古美術研究所

姜仁旭 2011 「ロシア沿海州出土石剣の研究」 型式、編年および韓半島との比較を中心に」 『東北亜文化研究』第28集 慶尚大学校博物館 2011 「泗川本村里遺跡」 慶尚大学校博物館研究叢書 第33輯

慶尚北道文化財研究院 2010 『達城坪村里遺跡』

金邱重 1996 「韓国式石剣の研究(1)」 『湖巖美術館研究論文集』1、湖巖美術館、17〜84頁

金承玉 2007 「墳墓資料を通してみた青銅器時代社会組織と変遷」 『階層社会と支配者の出現』 韓国考古学会

金元龍 1971 「韓国磨製石剣の起源に関する一考察」 『白山学報』10号 白山学会

金載元・尹武炳 1967 『韓国支石墓研究』 国立博物館考古調査報告書 第6冊

金宰賢 2002 「人骨からみた南江大坪人」 『青銅器時代の大坪・大坪人』 国立晋州博物館特別展示図録

金鐘一 2007 「階層社会と支配者の出現」 を越えて」 『韓国考古学報』63輯、韓国考古学会

武末純一 2002 「遼寧式銅劍墓と国の形成」 積良洞遺跡と松菊里遺跡を中心に」 『清溪史学』16・17合輯、韓国精神文化研究院

朴宣映 2004 「南韓出土有柄式石剣研究」 慶北大学校大学院考古人類学碩学位論文

朴善周 2010 「大邱達城郡坪村里出土青銅器時代人骨の人類学

庄田慎矢・寺前直人 2012 「特輯『東北アジアの武器形石器』に寄せて」 『古代文化』第64巻第1号 財団法人古代学協会

孫陵鎬(庄田慎矢訳) 2006 「韓国青銅器時代磨製石剣研究の回顧と展望」 『古文化叢書』第55集 九州古文化研究会

孫陵鎬(庄田慎矢訳) 2008 「朝鮮半島における磨製石剣の展開と起源について」 『地域・文化の考古学』下條信行先生退任記念論文集、下條信行先生退任記念事業会

孫陵鎬(庄田慎矢訳) 2012 「朝鮮半島の銅剣模倣石剣」 『古代文化』第64巻第1号 財団法人古代学協会

高橋健自 1925 「第十一章 石剣との関係」 『銅鉾銅剣の研究』 聚精堂書店

武末純一 2004 「弥生時代前半期の暦年代」 北部九州と朝鮮半島南部の併行関係から考える」 『福岡大学考古学論集』小田富士雄先生退職記念

田村晃一 1963 「朝鮮半島の角形土器とその石器」 『考古学研究』10-2

田村晃一 1988 「朝鮮半島出土の磨製石剣について」 『東京国立博物館美術誌 MUSEUM』No.452

中村大介 2012 「弥生文化形成と東アジア社会」 塙書房

平郡達哉 2008 「朝鮮半島嶺南地域における副葬磨製石剣の性格」 『王権と武器と信仰』(菅谷文則編) 同成社

平郡達哉 2009 「朝鮮半島無文土器時代の棺外副葬」 慶南地域の事例」 『花園大学考古学研究論叢Ⅱ』 花園大学考古学研究室

平郡達哉 2014 「列島における支石墓の受容と変容」 『平成26年度瀬戸内海考古学研究会』発表要旨

朴宣映 2009 「朝鮮半島中南部における有柄式石剣の編年と地域性」 『考古学研究』第56巻第1号 考古学研究会

宮本一夫 2004 「中国大陸からの視点」 『季刊考古学』88 雄山閣

CHEONGHAK

的調査」 『達城坪村里遺跡』 慶尚北道文化財研究院

裴眞晟 2006a 「石剣出現のイデオロギー」 『石軒鄭澄元教授停年退任記念論叢』 釜山考古学研究会論叢刊行委員会

裴眞晟 2006b 「無文土器社会の威勢品副葬と階層化」 『階層社会と支配者の出現』 韓国考古学会創立30周年記念韓国考古学全国大会発表要旨 韓国考古学会

成璟璐 2005 「韓国南西部地域支石墓出土石剣」 全南大学校大学院碩学位論文

孫陵鎬 2006 「青銅器時代磨製石剣研究」 書景文化社

孫陵鎬 2009 「湖西地域磨製石剣の変化相」 『湖西考古学』20 湖西考古学会

宋華燮 1994 「先史時代岩刻画にあらわれた石剣・石鏃の様式と象徴」 『韓国考古学報』31 韓国考古学会

沈奉謹 1989 「日本弥生文化初期の磨製石剣に対する研究」 韓国の磨製石剣と関連して」 『嶺南考古学』6 嶺南考古学会

安在晤 2006 「青銅器時代集落研究」 釜山大学校大学院博士學位論文

ウリ文化財研究院 2009 『晋州中川里遺跡』

劉美香 2006 「青銅器時代錦江流域出土磨製石剣に対する分析」 支石墓と石棺墓・(石蓋) 土壙墓出土品を中心に」 『研究論文集』第7号 湖南文化財研究院

尹德香 1988 「徳時里신기支石墓」 『任岩담ム水没地域文化遺蹟発掘調査報告書』

尹昊弼 2009 「青銅器時代墓域支石墓に関する研究」 『慶南研究』創刊号、慶南発展研究院歴史文化センター

李相吉 2000 「青銅器時代儀礼に関する考古学的研究」 大邱曉星カトリック大学校大学院博士學位論文

李相吉 2006 「区画墓とその社会」 『錦江・松菊里型文化の形成と発展』 湖南・湖西考古学会合同学術大会発表要旨

- 李盛周 2000 「パ・支石墓・農耕社会の記念物」『韓国支石墓研究の理論と方法―階級社会の発生』崔夢龍・金仙宇編 周留城
- 李盛周 2006 「韓国青銅器時代」社会、考古学の問題』『古文化』68 韓国大学博物館協会
- 李秀鴻 2005 「検丹里式土器の時空間的位置と性格に対する一考察」『嶺南考古学』36 嶺南考古学会
- 李栄文 1997 「全南地方出土磨製石剣に関する研究」『韓国上古史学報』24 韓国上古史学会
- 李栄文 2002 「韓国青銅器時代研究」学研文化社
- 李栄文・鄭基鎮 1993 「麗川積良洞上積支石墓」全南大学校博物館・麗川市
- 李ジェウン 2011 『南韓地域青銅器時代住居址出土石剣研究』木浦大学校考古人類学科碩士学位論文
- 李熙濬 2011 「韓半島南部青銅器・原三国時代首長の権力基盤とその変遷」『嶺南考古学』58 嶺南考古学会
- 任鶴鐘 2003 「南海岸新石器時代の埋葬遺構」『先史と古代』18輯、韓国古代学会（訳・平郡達哉 2007 「韓半島南海岸新石器時代の埋葬遺構」『古代文化』vol.59-II）
- 張龍俊・平郡達哉 2009 「有節柄式石剣からみた無文土器時代埋葬儀礼の共有」『韓国考古学報』72集 韓国考古学会
- 庄田慎矢 2007 『南韓地域青銅器時代の生産活動と社会』学研文化社
- 趙栄済 1998 「泗川本村里遺跡」『南江ダム水没地区の発掘成果』嶺南考古学会
- 平郡達哉 2012 『墳墓資料からみた青銅器時代社会』釜山大学大学院博士論文
- 平郡達哉 2015 「韓半島出土磨製石剣研究の動向と課題」『牛行李相吉教授追慕論集』

河仁秀 2000 「南江流域無文土器時代の墓制」『晋州南江遺跡と古代日本』慶尚南道・仁済大学校加耶文化研究所

黄昌漢 2008 「青銅器時代裝飾石剣の検討」『科技考古研究』第14号 亜州大学校博物館（平郡達哉 2015 「朝鮮半島青銅器時代における裝飾石剣の検討」『社会文化論集』第11号 根大学法文学部社会文化学系）

●英文

Oksana Yanshina・Shinya Shoda 2013 『Weapon-Shaped Stone Tools from the Russian Far East: The Museum Collections』

- *1 磨製石剣の型式分類に対する詳細な研究史については、以下の文献で整理されており参照されたい（田村 1998、金邱軍 1996、孫 2006・2008）。
- *2 黄昌漢は裝飾石剣の分布地域が嶺南地域にのみ限定され、さらに支石墓の上石に磨製石剣が表現されている岩刻画の分布と重複する点から、当時の磨製石剣が副葬用だけでなく崇拜の対象として扱われていたと指摘している（黄昌漢 2008）。
- *3 尹昊弼は個別の埋葬遺構の範囲を示す敷石・積石を「墓域」とし、複数の埋葬遺構が群集している墳墓群の領域を「墓区」と定義しており、本稿でもこの概念を用いる（尹昊弼 2009）。